

平均値の比較では1.9倍である。したがって、試験前期と後期の摂餌量の相違の主因はウニの大きさの違いによるものとは考えられない。

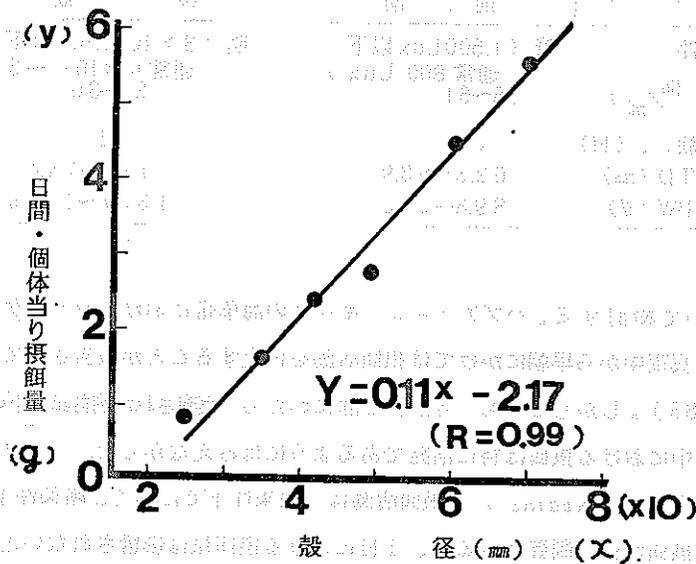


図-5 エゾバフンウニの大きさと摂餌量

Fuji (1967) P.120 Table 19より

試験前期のウニは試験開始までに、配合飼料（モイストペレット）の摂餌経験が全くない。当然のことながら、試験後期のウニは40日間の経験がある。

本試験(3)の摂餌量の経過は初期に少なく、後期になるほど多くなる直線的増加の傾向を示している。同様のことは試験(1)及び試験(2)の摂餌量の経過でもみられ、特にモイストペレット餌料において顕著であった。

このことは 自然条件下では、シラヒゲウニがおおかた摂餌したことがないと思われる配合飼料（モイストペレットのみ）の摂餌の経験の有無は その後の同配合飼料の摂餌に大きく関与することを示すものであろう。

したがって試験前期と後期における摂餌量の大きな相違は ウニの大きさや光条件、飼育密度の違いによるものではなく 経験即ちウニの慣れによるものであると考えられる。

モイストペレットの摂餌量が初期に少なく、飼育後期になるほど多くなるのは、ウニの側からみればウニの慣れによるものであるが、それはまたモイストペレットの嗜好性が劣ることを示すものであった（試験1、2）。

モイストペレットの嗜好性を改善するため、本試験(3)ではモイストペレットに、かにかまが $\frac{1}{5.5}$ 量、スジアオノリが $\frac{1}{6}$ 量混和されたが、その効果はみられなかった。

配合飼料（モイストペレットのみ）の栄養的欠陥性（摂餌活力）飼料種類別摂餌量については、試験前期においては 飼料種類間の差は小さいが試験後期の飼料種類別摂餌量の差は大きい。特に微細藻類補給モイストペレット給餌区及びスジアオノリ入りモイストペレット給餌区の摂餌量は